４月５日（日）マルコの福音書１６章１～８節

「驚くことはありません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょう。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められていた場所です。」（６節）

安息日が終わるのを待って、マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメは、イエス様に油を塗りに行こうと思い、香料を買いました。（１節）日が昇ったころ墓に行きましたが、墓の前の石は転がしてあり、中に入ると、真っ白な衣をまとった青年がいました。そして「あの方はよみがえられました。」（６節）と、キリストの復活を告げるとともに、７節では「さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい。」と言われているにもかかわらず、彼女たちは、「だれにも何も言いませんでした。」（８節）恐ろしかったからだと、その理由が説明されています。私たちは、イースターとしてキリストの復活を喜び祝っていますが、それは私たちに信仰が与えられているからです。特に、キリストは私たちの初穂として死者の中からよみがえられました（コリント人への手紙第一１５章２０節）これは、私たちの死からのよみがえりの保証であって、私たちもいつの日にかイエスのように死者の中からよみがえることができると信じているのです。だから、イースターは私たちにとって大いなる喜びの日なのです。その喜びを自分だけのものとすることなく、多くの人々に福音としてこのキリストの復活を宣べ伝えたいと思わされます。主が私たちに「さあ行って、伝えなさい。」と言われる人はないでしょうか。

空の墓の中にいた青年は、「イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます。」と言われました。弟子たちは、イエス様が逮捕された時に、イエス様を見捨てて逃げてしまいました。しかしイエス様は弟子たちを決して見捨てず、彼らに会ってくださると言われました。それは彼らの信仰を回復させるため、弟子としての使命をもって新たな人生の出発をさせるためでした。私たちも弟子たちと同じように、罪を犯し、さまざまな失敗を重ねながら人生を送っている者たちですが、イエス様は決して見捨てず、私たちにお会いになってくださり、みことばをもって私たちを慰め、励ましながら信仰を回復してくださいます。その恵みと主のあわれみに今日も心から感謝しましょう。

４月６日（月）サムエル記第二２章１～４節

「この後、ダビデは主に伺った。」（１節）

サウルの死により、ダビデはもはやガテの領主アキシュに仕える必要もなくなり、ペリシテ

の地であったツィクラグを離れる時が来ました。その時にダビデが考えたのは、ユダに上って行くということであり、これは常識的な判断のように思えましたから、自分の思う場所にすぐにでも上って行っても良さそうなものです。しかし、ダビデは、まず「ユダの町のどれか一つに上って行くべきでしょうか。」と主に伺います。主はダビデに「上って行け」と答えられ、「どこに上ればよいでしょうか」との問いには、「ヘブロンに」と答えられました。ダビデは二人の妻を連れて、ヘブロンへ上って行き、ダビデは自分とともにいた者たちも家族ごと連れて上り、ヘブロンの町々に住みました。ユダの人々は、ダビデに油を注ぎ、ユダの家の王としました。

私たちも何か決めなければならないことがあるときには、主に伺ってから決めているでしょうか。主のみこころを全く求めないような信仰の歩みをしているわけでなければ、私たちは主に伺ってから物事の判断をするはずです。主に尋ねないのであれば、まずその一つの理由は、自分が人生の主になっているからです。主に従いたいとは思いつつも、自分の思いとは全く別の方向に導かれることは願わないということがあります。そして、もう一つが、主に祈っても答えが待てないということがあるかもしれません。主はご自分のペースで私たちに答えられるお方です。待つべき時には、忍耐をもって待たなければなりません。主の答えは、遅すぎることも早すぎることもありません。さらに、主が答えてくださるとは思ってないということがあります。もちろん、祈っているとどこから主の御声が聞こえてくるということでもありませんし、主の答えは、そのような神秘的なかたちで与えられるのではなく、祈りにより、みことばを通して与えられます。大切な決断をすべき時にこそ、祈りとみことばをもって主に伺いましょう。主は必ず答えをくださいます。

４月７日（火）サムエル記第二２章４～７節

「あなたがたが主に祝福されるように。あなたがたは、あのような真実を尽くして主君サウルを葬った。」（５節）

ヤベシュ・ギルアデの人たちが、サウルと息子たちの死体を城壁から取り下ろし、遺骨をヤベシュにあるタマリスクの木の下に葬り、七日間断食をしたことが、サムエル記第一３１章１０～１３節に記されています。このことがダビデに知らされると、ダビデは使者を遣わして、真実を尽くして主君サウルを葬ったことのゆえに、彼らを祝福しました。さらに「あなたがたがそのようなことをしたので、この私もあなたがたに善をもって報いよう。」と言います。７節に「あなたがたの主君サウルは死んだが、ユダの家は私に油を注いで、自分たちの王としたからだ。」とありますように、王となろうとしている自分は、ヤベシュ・ギルアデの町の人々と同

盟関係を結びたいというダビデの意思表示であると思われます。７節の「今、強くあれ。勇気ある者となれ」を、ダビデの王室に所属して、そこで職務を遂行することと解釈して、自分のもとで仕えるようにとの申し出と取る人もありますが、ここでは王としてダビデを受け入れてくれるようにとの申し出と取ったほうがいいかもしれません。

ダビデは、ヤベシュ・ギルアデの人たちに、「あなたがたが主に祝福されるように」「今、主があなたがたに恵みとまことを施してくださるように」と祈りました。もちろん、ヤベシュ・ギルアデの人たちは、ダビデにそのように言ってもらおうと思ってしたわけではないでしょう。むしろ、サウルに対する思いがあふれ出た行為だったはずです。私たちも、誰かに対する愛から出た行為は、必ず神の祝福、主の恵みとまことの施しへとつながっていきます。そして、その私たちの愛から出たわざは、必ず主に対する証しとなり、主がほめたたえられるようにされます。私たちの行いが愛から出たものとされますように。

４月８日（水）サムエル記第二２章８～１１節

「ダビデがヘブロンでユダの家の王であった期間は、七年六か月であった。」（１１節）

８節でサウルのおじであり（サムエル記第一１４章５０節）軍の長であったネルの子アブネルが、油注ぎによりダビデをユダの家の王としたことと並行するかたちで生き残っていたサウルの子イシュ・ボシェテを連れてマハナイムに行きます。そして９節を見ますと、このイシュ・ボシェテを全イスラエルの王としました。ある意味、サウルの死後二人の王がイスラエルに現れたこととなります。もしかするとアブネルは、イシュ・ボシェテを擁立することで自分が権力を握ろうとしたのかもしれません。確かに、サウル王の実の息子であったイシュ・ボシェテを王にすることは、人間的な見方からすれば決して不自然なことではありません。しかし、ダビデはサムエルから油注ぎを受け、主のみこころからすれば、次期王はダビデに決まっていたということになります。ですから、世継ぎの順とか権力欲ということではなく、主のみこころに従って王を立てるべきでした。このようなことからも、サウルの死後のイスラエルは非常に混沌とした状況であったことが分かります。

１０節でサウルの子イシュ・ボシェテは四十歳で王となり、二年間王であったとありますが、４章５～７節を見ますと、彼は昼寝の最中に突き殺されました。一方ダビデは１１節を見ますと、ヘブロンでユダの家の王であった期間は、七年六か月であったとあります。５章３節ではダビデに油を注いでイスラエルの王としたとあり、５節ではエルサレムでは三十三年王としてイスラエル全体を治めましたので、合計約四十年間王であったことが分かります。ヘブロンで

の七年六か月を長いか短いかは何とも言えないところではありますが、サムエルから油注ぎを受けていたにもかかわらずダビデはすぐに王にはなれませんでした。ある意味七年六か月の間ユダの家の王として全イスラエルを統治する王となるために待たされたとも言えます。私たちも主の召しを通しての働きに就く前や、さまざまなことで主によって待たされることがあります。しかし、これは決して無駄な時間ではなく、必ずその人にとって必要な時間なのです。私たちも主によって待たされると感じる時にも、信仰による忍耐を働かせて主が事を行われる時を待ちたいと思わされます。

４月９日（木）サムエル記第二２章１２～１７節

「その日、戦いは激しさを極め、アブネルとイスラエルの兵士たちは、ダビデの家来たちに打ち負かされた。」（１７節）

アブネルが、イシュ・ボシェテの家来を率いてマハナイムを出て、ギブオンへ向かったのは、４～７節にありますようにダビデがヤベシュ・ギルアデに使者を遣わしたからではないかと思われます。つまり、サウルを慕っていたヤベシュ・ギルアデの人たちをダビデが自分たちの味方に引き込もうとしているとアブネルが勘ぐった可能性があります。そうすると、ダビデの甥のヨアブ（歴代誌第一２章 15,16 節→ツェルヤはダビデの姉妹）もダビデの家来たちと一緒に出て行き、ギブオンの池のそばで互いに会うこととなりました。そして１４節でアブネルは闘技をすることを提案します。ヨアブはその提案を受け入れ、イシュ・ボシェテの側から十二人、ダビデの側から十二人が、それぞれ順番に出て行き、闘技が行われました。１７節を見ますと、結局アブネルと彼が率いた兵士たちは、ダビデの家来に打ち負かされることとなりました。

アブネルからしますと、兵を率いて行く正当な理由があると思ったのかもしれませんが、それは闘技から、最後には激しい戦いとなりました。（１７節）この後アブネルは、自分の後を追ってきたアサエルを殺してしまいます。（２３節）このことがツェルヤの息子たちの憎しみとなり、アブネルは、ツェルヤの息子の一人のヨアブによって殺されることとなりましたが、「こうして、アブネルは、彼がヨアブの弟アサエルの血を流したことのゆえに死んだ。」（３章２７節）とあります。まさに、戦いは激しい憎しみへと発展していったことが分かります。人の憎しみは、放っておくと殺意にまで変わることをあらためて思わされます。もちろん私たちも殺意を抱くほどに人に対して憎しみを持つことはないでしょう。しかし、怒りや憎しみなど悪しき感情をそのまま放置しておくと、それは必ず私たちのうちで罪に変わります。主の十字架を仰いで、悪しき感情を主にあって処理していただきましょう。

４月１０日（金）サムエル記第二２章１８～２８節

「ヨアブは角笛を吹いた。それで兵たちはみな立ち止まり、それ以上イスラエルの後を追わず、戦いを続けることはなかった。」（２８節）

ダビデの家来たちに打ち負かされたアブネルは、その場から逃げようとしますが、ツェルヤの三人息子のうちの一人のアサエルは、アブネルの後を追いました。１９節「右にも左にもそれずに、アブネルを追った。」とあり、アブネルが、自分を追ってくるアサエルに「右か左にそれ、若い者の一人を捕らえ、その者からはぎ取れ。」と言ったのは、自分ではなく若い者を捕らえて、その者から分捕り物となりそうな戦利品を得よとの意味ですが、アサエルは、アブネルを追うことをやめず、ほかへ行こうとしませんでした。それは、アブネルだけを攻撃目標に定めていたということです。２２節を見ますと、アブネルはアサエルの兄ヨアブのことで彼を殺したくはないと思っていましたが、アブネルは、槍の石突きでアサエルの下っ腹を突いたので、アサエルは、その場に倒れて死んでしまいました。２６節でアブネルの側から停戦交渉が持ち出されます。その停戦交渉をヨアブは受け入れ、「それで兵たちはみな立ち止まり、それ以上イスラエルの後を追わず、戦いを続けることはなかった。」（２８節）とあります。
１４節で、最初に「さあ、若い者たちを出し、われわれの前で闘技をさせよう」と提案したのはアブネルでした。まさかこれほどまで戦いが激しくなるとは思わなかったのか、このままでいくと自分の命も危ういと思ったのか分かりませんが、何事もなかったかのように停戦を申し出ます。私たちも軽はずみな言葉が思わない結果を生むことがしばしばあります。ですから、言葉を発する時には慎重にすべきであり、主によって自分が口にする言葉を守っていただかなければなりません。

４月１１日（土）サムエル記第二２章２９～３２節

「彼らはアサエルを運んで、ベツレヘムにある彼の父の墓に葬った。」（３２節）

戦いが終わりましたので、アブネルとその部下たちはマハナイムに着き、ヨアブとその部下たちは一晩中歩いて、夜明けごろヘブロンに着きました。（３２節）３１節を見ますと、ダビデの家来たちは、アブネルの部下であるベニヤミン人のうち三百六十人を討ち取り、ダビデの家来の側の被害は１９人とアサエルがいなくなっただけですから、数の上ではダビデの家来の側の大勝利と言えますが、しかしヨアブは、自分の大切な弟であるアサエルを失った悲しみはどれほどのものだっただろうかと思わされます。

昨日は、自分たちの軽率な言葉により思わぬ結果になりかねないことを書きました。それとともに今日は、弟を失ったヨアブを通して教えられることがあります。もしかすると、ヨアブが慎重に考えを巡らせることで、アブネルとの闘技を断っていたなら、アサエルは死ななかったのではないかと思ったのではないでしょうか。私たちは、軽率な言葉だけではなく、軽率に行動してしまうことがあります。それにより取り返しのつかない経験をしたことはないでしょうか。私たちは、何かの行動をする前に、まずは主に祈って、主のみこころを伺うべきです。サムエル記第一３０章８節でアマレクの略奪隊を主のみこころにより追いかけ、彼らに勝利したダビデの姿とはあまりにも対照的です。私たちはいかがでしょうか。ダビデのように祈って主のみこころに従って行動しているでしょうか。決して後々後悔することのない行動をキリスト者として私たちは心がけたいと思わされます。